概 要

【研究背景】

回復期リハビリテーション看護(以下、回リハ看護とする)は、看護による効果の評価を患者の主観的な体験に価値を置くため、具体的な介入方法がみえづらいという特性をもっている。このことは回リハ看護師の継続的な教育を困難としている¹⁾。どのような教育・支援が必要かを明らかにすることで、回リハ看護師の能力の向上に繋がるのではないかと考え、コンピテンシーという概念に着目した。回リハ看護のコンピテンシーについての先行研究は少なく、コンピテンシーの概念から回リハ看護師の教育支援について研究した文献はみつからなかった。

【研究目的】

回リハ看護に従事する看護師のコンピテンシーの現状を調査し、回リハ看護師としての能力向上のために必要な教育的支援について示唆を得ることを目的とした。

【研究方法】

1. 研究対象:Aグループ病院(6施設)の回復期リハビリテーション病棟(12病棟)に勤務する看護師191名 2. 研究期間:令和3年6月～8月 3. 調査方法:質問紙調査法 4. 調査内容:基本属性、コンピテンシー毎の行動指標(80項目)²⁾ 5. 分析方法:基本属性によるコンピテンシー合計得点の差を対応のないt検定で検証し、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。倫理的配慮:研究者所属病院の倫理委員会の承認を得た。対象者には書面で同意を得た。

【結果】

コンピテンシーの平均点を比較すると、社会復帰や家族への支援、後輩への指導といった項目が他と比べて低い結果となった。また、回リハ新人看護師と中堅以上の看護師との比較検定では〈家族を支える〉〈自己効力感が高まるような関りで行動変容を促す〉〈後輩には信念を持ってリハビリテーション看護を手解きする〉の3項目において有意に低い結果となった。

【考察】

回リハ看護師は配置転換によって従事する者が7割と多く、看護の基礎的な技術や病態生理の知識は身につけている者が多い。一方で回リハ看護の高い専門性³⁾を理解している者は少ないと考える。これまでの経験を回リハ看護の専門性に結びつける必要があり⁴⁾、実際の介入場面を増やし、経験を積むことができるよう具体的な教育プランが必要となる。なかでも回リハ経験の浅い看護師は、家族への情報提供や精神的な支援を行う能力、自己効力感を高めるようなコミュニケーション技法の獲得や認知症看護の知識の充足が必要と考えられる。

【結論】

回リハ病棟看護師における10のコンピテンシーは、より回リハ看護の専門性が高いとされる項目が低い傾向にあった。また、回リハ経験の浅い看護師には〈家族を支える〉〈自己効力感が高まるような関りで行動変容を促す〉〈後輩には信念をもってリハビリテーション看護を手解きする〉の3項目に重きをおいた教育の必要性が示唆された。

【引用参考文献】

- 1) 松本志保子、片山はるみ(2017)回復期リハビリテーション看護に従事する看護師のコンピテンシー、日本看護管理学会誌、21(1)17-29
- 2) 松本志保子、片山はるみ(2020)リハビリテーション看護コンピテンシー評価票の内容妥当性の検討、日本看護管理学会誌、24(1)104-112
- 3) 齋藤順子(2019)職域を超えてケアを提供する回復期リハビリテーション病棟の取り組み Nursing BUSINESS 2019 vol.13 no.5 他
- 4) 山元由美子、長谷龍太郎、藤井恭子、石鍋圭子、落合幸子、野々村典子(2003)看護領域の違いによる職業アイデンティティの差異の検討—一般病院とリハビリテーション専門病院の看護師の比較—茨城県立医療大学紀要 第8巻 ASVPI volume8